中国現代文学選集 15　記録文学集 I

抗日戦回想録

郭沫若　岡崎俊夫訳

聞記

茅　盾　竹内　好訳

を党に

呉運鐸　竹内　実訳

目次

抗日戦回想録

岡崎俊夫訳

前記……三
第一章　南遷……四
第二章　動揺……一
第三章　再動揺……二〇
第四章　準備……二六
第五章　宣伝週……三六
第六章　退潮期……四四
第七章　大武漢防衛……五三
第八章　推進……六二
第九章　反推進……七二

第十章　戦区を行く……八四
第十一章　生活のあれこれ……九六
第十二章　疾風は勁草を知る……一〇八
第十三章　撤退前後……一一八
第十四章　流　亡……一二九
第十五章　長沙の大火……一四〇
第十六章　幽谷に入る……一五三
後　記……一六四

西北見聞記

竹内　好　訳

一　蘭州(ランチョウ)あれこれ……一六九
二　吹雪の華家嶺(ホウチアリン)……一七三
三　白楊礼讃……一七六
四　西安エピソード……一七八

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

五　市　場……一八一
六　「戦時景気」の寵児――宝鶏（パオチー）……一八三
七　拉拉車（ララチョ）……一八六
八　秦嶺（チンリン）の夜……一八八
九　某　鎮……一九〇
十　「天府の国」の意義……一九二
十一　成都――「民族形式」の大都会……一九三
十二　「霧の重慶」こぼれ話……一九六
十三　いちばんすばらしい商売……二〇〇
十四　運転手生活の断片……二〇一
十五　貴陽巡礼……二〇五

すべてを党に

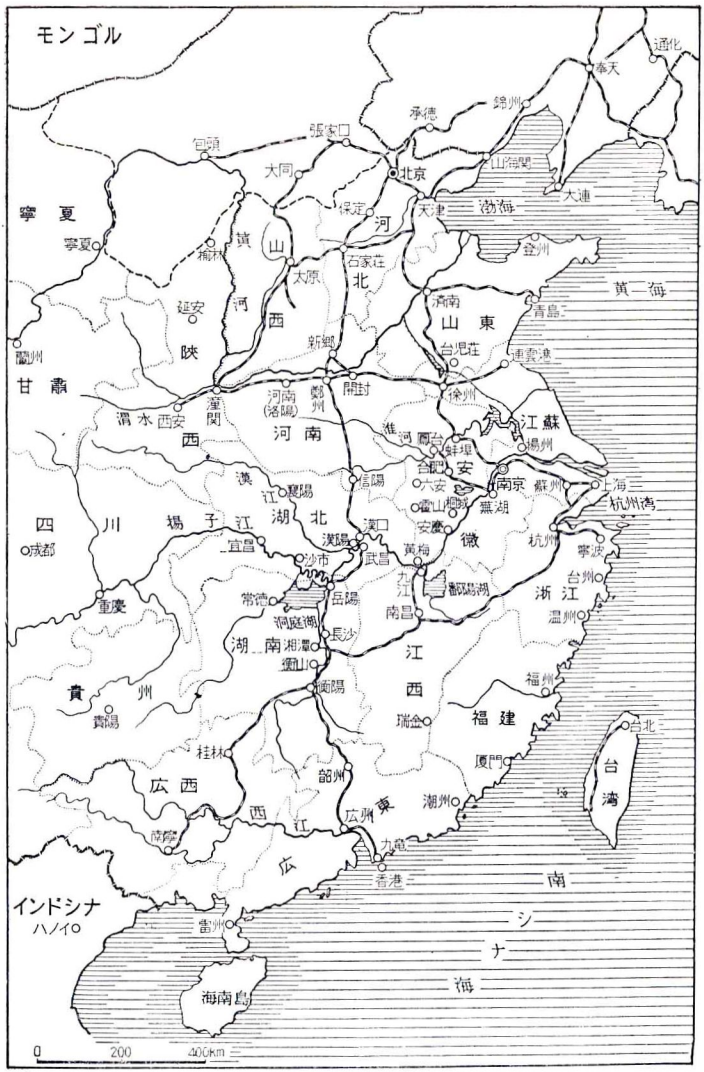
竹内　実　訳

幼年時代……二一一
労働のはじまり……二一八
坑内で……二二六

自　覚……二三六
われわれの工場……二四四
すべてを党にささげて……二五五
移　動……二六〇
反　掃　蕩……二六八
二回目の負傷……二七五
新　任　務……二八二
榴弾の製造……二九四
時限爆弾の分解……三〇一
われわれの平射砲……三〇七
三回目の負傷……三一四
病室での生活……三二四
真の友情……三三三
永遠に前進しよう……三四三
解　説……三四六

抗日戦回想録

岡崎俊夫訳


モンゴル
通化
奉天
錦州
承德
張家口
包頭
大同
北京
山海関
大連
渤海
天津
保定
河
寧夏
寧夏
榆林
晋
山
石家荘
太原
北
済南
山東
黄海
青島
延安
陝
西
新郷
台児荘
連雲港
蘭州
甘粛
徐州
開封
河南
(洛陽)
鄭州
渭水
西安
潼関
河南
西
淮河
鳳台
蚌埠
江蘇
揚州
合肥
安
南京
蘇州
上海
杭州湾
六安
霍山
桐城
蕪湖
安慶
徽
杭州
寧波
漢
江
襄陽
信陽
湖北
漢口
四
川
場子江
成都
宜昌
漢陽
沙市
武昌
黄梅
九江
鄱陽湖
台州
浙江
重慶
常德
岳陽
南昌
温州
洞庭湖
長沙
湖南
湘潭
衡山
江
西
福州
貴州
貴陽
衡陽
瑞金
福建
台北
桂林
厦門
台湾
広西
韶州
広州
東
湖州
西江
南寧
九龍
香港
広
南
インドシナ
ハノイ
雷州
シ
ナ
海
海南島
0
200
400km

抗戦期の中国（東部）

前　記

解放一年前の一九四八年、香港にいたとき、夏衍(シアエン)同志が『華商報』の特集欄「茶亭」を編集していた。彼の激励と督促のもとで、私は、国民党地区の抗日戦争の思い出を書かされて、毎日、新聞紙上に発表した。

書いたのは、上海、南京失陥ののち武漢を衛(まも)って、ついにそこを放棄するまでの期間で、長沙の大火、桂林への退却、重慶への撤退準備まで書いたら、私の香港の寓居生活が終りかけた。それは一九四八年十一月淮海(ホイハイ)会戦の前夜で、私は香港を去って解放区へ入ろうとしていたのだ。そのために、回想録も自然と一段落をつげた。

百花文芸出版社がこの一段階の抗戦記録を改めて出版したいというので、私はいま旧稿を整理し、「洪波曲」と名づけて再び読者におめにかけることにした。

これは主として私個人の思い出によるもので、抗日戦争時期を全面的に反映したものではない。

整理してみて、この一段階の思い出は書いておいてよかったと思う。もしあの時書いておかなかったら、十年後の今日、ほとんど記憶が失せていたであろうから。

読者はこれを歴史資料として読んでほしい。

一九五八年五月九日

第一章　南　遷

一　孤島脱出

上海が「孤島」になってから、抗戦の初期に宣伝活動で大きな役割をした『救亡日報』が、まっさきに発行停止になった。どの新聞も論調を改め、救亡出版物や救亡活動は相前後して停止した。抗戦の書籍、新聞を売って一時は大いに繁昌した街頭の本屋も完全に模様を変えてしまった。上海は麻痺状態におちいった。

文化活動家がこんなところに残っていても、もはや役に立たない。みんな、どうしてこの孤島を抜け出そうかと思いめぐらし、いろいろ計画を立てていた。あるものは革命の聖地——延安へ行き、あるものは大後方（前線に対してまだ占領されていない奥地のこと）へ移ってひきつづき活動をつづけた。後者は演劇界の友人たちが十の救亡演劇隊を作ったように、集団行動をとって、それぞれ後方へ出発したが、中には個人的行動をとったものもあって、私はその一人であった。

私は十一月二十七日（一九三七年）に上海を離れたのだが、この日付ははっきり覚えている。というのは、私が日本から逃がれて上海についた日と同じだからである。それは蘆溝橋事変後の七月二十七日である。私は上海にまるまる四ヵ月いたわけだ。

私と同行したのは、南洋に行ったことのある広東の男で、北伐（一九二六—七年の国民革命）のとき、総政治部で仕事をしていたのだが、その男の名はいま思い出せない。私は、その時分、南洋へ行って華僑同胞から寄付をつのって新聞を出すか、ほかに何か文化活動をしようと思っていたので、こんな同行者を選んだのだった。

上海を離れたのは早朝で、フランス船に乗った。この船は、公和祥波止場（対岸にある）に碇泊していて、直接乗り込めないので、客はランチに分乗してバンドから運ばれたのだ。

汽船の碇泊しているあたりには、日本軍の主力艦「出雲」がいた。私たちを乗せたランチが汽船についたとき、「出雲」のあたりから水上機が一機飛び立って、汽船の上をぐるぐる三回低空飛行をして去った。このいやらしい示威はどういうつもりか知らないが、船の人たちは黙々として憤怒の表情をたたえていた。

船に乗ると、船員が、呉淞（ウースン）口を出れば安全だから、それまでは船室に入っているようにと注意した。

ところで、この船は日本の鬼が爆弾を落すに値するのに、落さなかった。呉淞口を出てわかったことだが、船は、国民党のいわゆる党・政の要人を満載していた。上海の著名人は

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

ほとんどこの船にいたのだ。われわれの側の友人も少なくなく廖夫人（廖仲愷未亡人、何香凝、廖承志の母）と鄒韜奮（抗日七君子の一人、故人）も期せずしてこの船に乗っていたのだった。

二　遙かに宋皇台を望む

香港についてから、私は六国飯店に宿をとった。たったひとり三階の海に面した部屋にいて、うたた寂寥にたえなかった。

南京政府の抗戦態度は、上海に四ヵ月いる間にもうすっかり呑みこんだ。軍事方面では迫られて武器をとったものの、政治方面ではその都度主義で日を送り、姿勢を変える誠意は少しもなかった。とりわけ民衆動員については、絶対に自由を許さなかった。なるほど「抗敵後援委員会」はいたるところに作られたが、それを口実にして金を集めるだけの天くだり組織で、実際には何もしなかった。

私としては南洋へ行って募金をしようと考えたものの、何ら当てがない。南洋には一度も行ったことがないし、募金しても成功するかどうかわからなかった。成功したにしても、わずかに文筆による宣伝ではどれだけの効果があるものやらわからない。

前途暗澹たるもので、自然気が滅入って来る。北方へ行っていたら、こんなことはなかったろう。なぜ、周揚（現中共宣伝部副部長）といっしょに延安に行かなかったのかと後悔した。

こうした気分は、陰鬱な天候と相まって私を苦しめた。私は露台から煙霧濛々たる海と、煙霧濛々たる九竜の向うの山を望みながら、はからずも旧体の詩を二首作った。

十載一たび来復し
ふたたびこの地に遊ぶ
興亡に感慨を増し
責の肩頭に在るあり

遙かに宋皇台を望めば
煙雲鬱として開かず
風に臨んで北地を思う
何事ぞ却って南に来るとは

十載一来復
両番此地游
興亡増感慨
有責在肩頭

遙望宋皇台
煙雲鬱不開
臨風思北地
何事却南来

十年前の一九二七年にも、私は香港へ来たことがある。それは「八一」革命（八月一日の南昌蜂起）が挫折したあとで、私は神泉から帆船に乗って来たのだった。そのときは、香港に一ヵ月近くいて、宋皇台へ遊覧に行き、やはり同じような感慨を催したのだった。あれからまるまる十年、中国の状態はどれほど進歩しただろうか。十年の内戦は、革命的人

民の武力に二万五千里の長征を余儀なくさせ、さらに日本帝国主義の狂暴な侵略を招来し、それは高潮のように数ヵ月間に中国の半分を席捲した、罪深い人たちは過ちを悔いることを少しも知らないのだ。

宋皇台は時代の象徴となったのではないか。

私の考古学についての知識は、あの高地にある二つ三つの大きな石は、氷河時代の遺物かもしれない、その中には豊富な科学的な意味が含まれているかもしれないと、私に語りかけたことがある。だが、それらが関わるところの歴史の悲劇は、むしろ私を重苦しく抑えつけるのであった。

歴史はその長い停滞の期間に、流れが主流から離れるようにうずをまいていたのだ。

宋朝は南方で終ったし、明朝もまた南方へ来て終った。現在もまた明末、宋末の時代であるのか。あのうずを打ち破って、歴史を再び繰り返さぬようにする、これこそわれわれの今日の急務である。

三　街頭、故人に遇う

上海を撤退した友人で、海路南下したものは、香港を中継地として、しばらく留まってから奥地に入って行った。それで、このあまり広くない島の町では、一度街へ出ると、いたるところで知人にあうのだった。

香港へ来てから二日目に、私は九竜に友人を訪ねての帰り、クイーンス・ロードの雪廠街へまがる角で一群の友人に出会った。日本から追い返された林林、姚潛修（ヤオチェンシウ）、葉文津（イエウンチン）、それに二人の日本に行ったことのない娘たちで、その一人は郁達夫（ユーフォン）（一九四五年南洋で日本軍に殺されたといわれる作家）の姪の郁風（ユーフォン）（画家）、もう一人は私のいまの愛人、于立群（ユーリーチェン）であった。彼らは、上海にいた時分、フランス租界の国際難民収容所で仕事をしていて、私はたびたび会っていた。なかでも立群とは、いっしょに何度も前線に抗戦将兵の慰問に出かけたことがある。大場鎮が陥落した夜も、彼女は私と他の友人たちと車で前線に出かけた。私は途中で別れて崑山（クンシャン）へ行き、彼女らは上海へ引き返したが、大場鎮を通ったとき、敵の砲撃にあって、あやうく命を落すところだったそうだ。

立群は『大公報』の日本特派記者、于立忱（ユーリーチェン）の妹で、この姉妹は于式放（ユーシーファン）の孫に当たる。原籍は広西省の賀県（ホー）だが、二人とも北平で育った。彼らの家庭の悲劇、官僚の家からおちぶれてゆく過程を、かつて立忱は日本で私に語ったことがある。立忱は貧と病にせめられ、蘆溝橋事変の起こる四ヵ月前、上海に帰り、まもなく自殺した。その告別式は立群と彼女の若い友人たちだけで執り行なわれた。そのとき、立群はすでに林林たちと一緒だったのだ。

七月に私も上海に帰り、林林たちの紹介で立群と知り合ったのだが、そのときびっくりした。まだ二十を少し出たぐら

いの若さで映画に演劇にはや一本立ちしていたのに、モダンな気風に少しも染まっていない。二本の編んだお下げ、藍色木綿の単衣、日にやけた黒い顔――田舎娘と変りがない。しかも抗戦の仕事には非常に熱心で、「八・一三」（上海事変勃発の日）以後はいつも外をかけ廻っていた。

みんなが、どうして上海を離れて後方へ移ろうかと計画していた時分、立群はすでに洪深（ホンシン）（先年死んだ劇作家）の率いる演劇隊に参加していたのだが、いざ出発という前夜に、私は彼女に、他の友人たちと海路をとって武漢へ行き、それから何とかして陝北（シンペイ）（延安地区）へ勉強に行った方がいいといって計画の変更を勧めた。彼女は私の勧めをきいて林林やその友人たちと一緒に、私よりひと足先に上海を離れたのだった。

彼らが上海を出るとき、私の日程もきまっていたが、機密保持のために彼らには黙っていた。私には数日後にはきっと香港で会えるに違いないということはわかっていた。はたしてそのとおり数日後に会ったが、向うでは意外の面持ちだった。

「あら、郭先生（クワー）じゃありません？」と立群が私を見つけた。ふだん無口な彼女がまっ先にこう叫んだのだ。

「まあ、私、先生は上海を死守されるんじゃないかと思ってましたわ」と、郁風が、いくらか大げさな言い方をした。

彼らは海陸通旅館（ハイルートン）に泊まっていたが、相談のすえ、その日の午後、一同六国飯店に引っ越して来た。

四　輾転反側

香港の救亡活動は当時相当に緊張していて、公開の歓迎会、講演会などがほとんど連日行なわれていた。私は出国の手続を進め、査証も何とか手に入れた。「白圭（バイグイ）」という偽名を使った。だが、友人の中に、何のあてもないのに南洋へ行ったって仕様がないじゃないか、それより国内でまず基礎を作っておいて、それから募集に行った方がいいのじゃないか、と勧めるものがあって、私はこの意見に従い、ともかく『救亡日報』を復活する仕事をしようと考えた。それが成功したら、友人たちの仕事の問題も解決するだろう。だが、『救亡日報』を復活するには、根拠地として最も適当なのは広州で、もしそれが出来れば、広州は華南における精神的とりでになる。香港では意味がない。「救亡」でなく、「流亡」になってしまう。

こんなわけで、香港に一週間ばかりぶらぶらして、ある朝、船に乗って広州へ行った。林林、潜修、文津、郁風、立群も同行した。

広州は、一九二六年北伐の年、私が三ヵ月余り住んでいたところで、ちょうど十二年ぶりに再び訪れたわけだ。街の有様は少しも変っていないが、話によると、郊外に住宅地区がひらけたそうだ。私は友人の紹介で「梅村（メイツン）」へ李という人を

訪ねて行った。この人は湖北の人で曽養甫（ツンヤンフー）（当時の広東市長、現在国府側）の下で活動をしていたし、夫人には北伐のさい漢口で時々会ったことがある。

そこは二階建てで、他に付属の建物や庭があってかなり豪壮だった。二家族が住んでいて、李夫人のほかは、譚小嶺（チェンシアオリン）という国民党広東省党部の主任委員がいた。この人と私は初対面だったが、顔を合わせるなり彼はいった。「国共合作の復活は、私と曽養甫の力です」この言葉はその後何度も彼の口から聞かされた。私は友人にきいてみたが、それによると、二人が間接の関係を通して初めて手紙を出したことは本当だった。

主人は二階の一間を私に提供した。小ざっぱりしていて、ゆっくり眠れそうだった。だが、なぜか、私はこの最初の夜、この静かな別荘で輾転反側してどうしても寝つかれなかった。眠れないと、旧い教育を受けたものは、つい詩が醗酵する。こんどは七律を一首作った。

ついに太歳の天を一周するに随って　竟随太歳一周天
重ねて番禺に入る十二年　重入番禺十二年
大業は成り難く北伐をなげく　大業難成嗟北伐
長纓いまだかけず南遷をはず　長纓未系愧南遷
鶏鳴いて、剣もて起ち中宵に舞　鶏鳴剣起中宵舞
い　狗吠関開上滸弦
狗吠えて、関開き上滸の弦あり　昨夜宋皇台下過
昨夜宋皇台下を過ぐ　帝秦誓不有臣連
秦を帝とするも誓って連（魯仲連）を臣とすることあらじ

五　壁につきあたって

どうしたらいいだろうか。新聞を発行するには、党政軍各方面との関係をつけなければならないし、彼らに金を出させなければならない。この仕事は、私の性格からいって、いささか不似合いだ。だが、自分は進んでそれを受け持ったのだ。

さすが石と化した広州でも、抗戦の大暴風を経て、かすかながら生命の脈搏が鼓動しはじめている。時々敵機の空襲があった。市街にはたまにトラの皮のように擬装した装甲砲車が出動し、防空施設もお粗末ながら各所に出来ていた。軍隊の中にも政治工作が回復しはじめ、所によっては短期訓練班が開かれ、泥縄式に宣伝人員を訓練していた。少なくとも抗戦のための宣伝なら禁を犯したことにならないのだ。

私は、こうした情況の下で、何度か歓迎会、講演会に出席し、また政府側の訓練班に頼まれて講演した。広州の放送局にも頼まれて、「民衆動員の必要」という題で放送もした。全くこれが核心的な問題だったのだ。だが、この核心は上

海、南京におけると同様、人々から重視されていなかった。民衆が動こうとしないのではなく、当局が民衆を恐れ、民衆が動くのを恐れていたのであった。それでどうして抗戦ができよう。どうして抗戦に前途があろう。

私は宿の主人の紹介で一度曾養甫（当時の広州市長兼財政庁長）を訪ね、『救亡日報』を復刊したい旨を伝えた。むろん多少寄付をしてくれるだろうという希望からであった。彼はそれは呉主席（当時の広東省主席）に話すのが一番いい、彼が承知すれば問題はない、といった。

呉主席とは呉鉄城のことだ。ちょうどうまいぐあいに二、三日して彼の方から私を官邸へ晩飯に招待した。大へんな盛会で、多くの人が同席した。席上、抗戦が長びいたら各種の物資が欠乏して来るし、新聞用紙の入手も困難になってくるという話になった。そこで彼は、広州の新聞は実際のところ多すぎるから取締らなければいけないといった。こうしてまず私の口をふさいでしまったのだった。

私は考えた。これはてっきり曾養甫のしかけたワナにちがいない。二人はうまく連絡をとっていたのだ。どうやら広州へ来たのは、画に描いた餅みたいなものだった。広州がこんなふうなら、南洋へ行ってみたって何ともなるまい。もともと大した希望を持っていなかった私ではあるが、ここでほんとうに心から失望した。

だが、実に意外なことに、少しも希望のないところで、またも希望が生まれてきた。それは一人の「軍人」が、私が壁にぶつかっているのを見て、「余漢謀に会ってみたら」といってくれたことだ。余漢謀（当時広東の軍司令官、現在台湾在住）には、私は面識がない。例の「軍人」は勇を奮って私のために紹介の労をとってくれて、それがうまくいった。余漢謀は私を彼の司令部に引見した。彼は私が口を開く前に、『救亡日報』の発行を支持したい、毎月一千元出そう、十二月分から渡すから、それを開設費にあてれば多少とも融通がきくだろうといってくれた。

彼がこうした気前を見せたのは私にも理解された。彼は蔣介石の直系でないので、人気とりに二股膏薬をはっていたのだ。

六　「さわる」

『救亡日報』の復刊の目鼻がつき、友人たちの活動の持場もきまった。林林・潛修・文津・郁風らはしばらく広州に留まって編集をたすけてくれることになった。同時に上海へ電報を打って編集長である夏衍（劇作家、現文化部副部長）に急いで来てもらうことにした。私はやはり南洋へ行きたいので、夏衍が来たら引き継いでゆっくり出かけることにした。

そうこうしているうちに新年が近づいて来た。梅村にいたのでは何かと不便なので、またも例の「軍人」のさそいをう

けて、いっそのこと城内の新亜酒楼に移って彼と同居することにした。そのときまた彼は私に工商界の友人を数名紹介し、この方面との関係をつけてくれた。ヘビの肉を食ったり、イヌの肉を食ったり、荔枝湾に遊んだり、六榕寺を見物したり、広東芝居を見たり、蛋民船を訪ねたり、全く妙な毎日を送っていた。南京の陥落も、「国民政府」の西遷も、軍事陣地の移転も、広州で見ていると、別の惑星の出来事のようだった。

突如、元旦に、私は一通の武漢からの電報を受け取った。内容はしごく簡単で「御相談したき用件あり、直ちにおいでを乞う、陳誠」とあるだけだ。上海・南京が陥ちてから、軍事と政治の中心は、すでに武漢に移っていて、陳誠（現国府行政院長）はそこの警備司令をしていることは、知っていた。だが、彼が何の「用件」で私と相談したいというのか。全くなぞであった。

いろいろと考えたあげく、ともかく武漢へ行ってみることにした。行ってみることは必要だ。そこへ行ってひととおり見て、それから南洋へ行っても遅くはない。八路軍はすでに漢口に事務所を設け、周恩来・董必武・葉剣英・鄧顕超（いずれも中国共産党の現存幹部）らも出て来ている。長いこと別れていたので、彼らにも会いたかった。

こうなると、立群をつれて行かねばならない。彼女は元来武漢へ行くはずになっているので、さっそく友人たちと別れて新亜酒楼へ越して来た。彼女は越して来てから、おとなしく一日中読書と習字ばかりしていた。黒々とした顔真卿ばりの字を書き、しかも懸腕である。これにはびっくりした。私も以前顔真卿の書を習ったことがあって懸腕には相当年季を入れたものだ。そこで、私は、いつ書法を習ったのかとたずねてみた。彼女は、これは家伝で、祖父が顔真卿を書き、母親も顔真卿を書き、自分も子供の時から習った、という。一種の家庭教育だろう。顔真卿の書は厳粛で模範的な作用をし、人の生活を厳粛なものにする。こんな厳粛な「妹」がそばで顔真卿を書いているので、私もついつりこまれ、彼女と並んで連日顔真卿ばりの書を書いた。

夏衍は五日に着いた。私たちは彼を歓迎して新亜酒楼に泊まらせた。引継ぎはすっかりかたづいて、『救亡日報』は元旦に正式に復刊し、長寿東路に社屋を設定した。広州に残した任務が一段落したので、私は出発できることになった。

六日の夜、私たちは粤漢線（広州―漢口間）の汽車に乗って、黄沙駅から出発した。私と立群、それに蘇という青年が同行した。この青年も例の「軍人」が、途中私たちの世話をするために紹介してくれたのだった。

大勢の友人が駅へ送ってくれた。一人の商工界の友人が、何度もくりかえしていった。「武漢へ行っても、決して役人になってはいけません。役についてない方が身軽です。なるべく早く広州へ帰っておいでなさい」この言葉は私を感動さ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook